

六ノ一一 笠置寺十三重塔扉咒願文

出典 弥勒如来感応抄（東大寺所蔵）

解説 建久九年十一月に完成した十三重塔の扉によせた呪願文。多数の人々の寄進によつて造られた十三重塔を般若（報恩）塔と称する由縁を記す。

原文

沙門釈貞慶敬發願曰
非空非有 三性微妙 俗諦真諦 二門甚深 以有尋空 遂会中道
從俗悟真 名為大覺 鱗甲羽毛 其形不同 一天之下 均含元氣
神人古今 其心雖異 同鄉之中 互結芳緣 沉於当今 君臣德化
沉於生育 父母恩愛 聖風惠露 不扞遠近 慈山乳海 難測高深
矧亦出世 親教導師 慈訓至重 因緣轉大 如此四恩 生々幾許
雖其一緣 世々無盡 若人自發 大菩提心 亦能勸他 同發此心
施真實法 一四句偈 仏説之為 能報四恩 我生神国 苟列人倫
重入釈門 懋馴仏法 一念大心 自未發起 豈勸他人 入無上道
二親昔志 今猶如忘 寧為群生 生大悲心 每見至孝 顧身雖恥
世人常心 多皆如是 忿々緩々 今生徒暮 自心他心 發趣何日
天照大神 吾朝始祖 四海万邦 誰洩其化 釈迦能仁 三界慈母
一代三宝 皆出彼功 聞上古風 仏神道隔 願本地月 權実門通
欲報一國 須仰二聖 難思方便 宜施引接 爰就当山 殊卜淨地
始穿石巖 新起宝塔 土木皆是 知識所助 知識則又 宿縁所追
郷相之家 貴女之室 綱維之客 清信之士 或構一級 或瑩九輪
或投黄金 或抽丹石 帝綱重々 表無碍境 華瓔離々 出有漏塵
世尊塔廟 以顯果德 層級有數 超十二縁 施主良田 以招梵福
展転無窮 及百千人 未必待勸 不敢思名 力無大小 志皆清潔
小識之誓 一念不空 莫大之功 二廻而終 所持尊像 敬安玉壇
本是毗首 為我降斧 所傳仏骨 永納宝瓶 久帶穢身 於已不輕
初謂臨終 親致瞻礼 今悅将来 広施利益 訪得異朝 般若真文
伝来往代 法華靈本 四王尊儀 每階安置 八天靈像 廻扉羅列
四十超劫 本生勝行 凶彼往事 増欣永恩 五百塵點 常在聖跡
写其風景 休恋慕心 金剛崛前 鸞鏡瑩光 浄月輪上 覺母留影
九年戊午 中冬玄律 八音調曲 衆香薰匂 供養恭敬 唄讚唱導
我願既滿 衆望亦足 万年末法 梁棟設傾 三会下生 礎石何改
古称此山 為靈鷲山 今号此塔 為般若塔 令見聞人 知報恩思

依覺母力	勸善提心	預有瑞夢	虛實雖疑	今果愚願	機緣得知
願以此功	歸入實際	能所亡相	自他滅罪	開闢以來	壞劫以前
內自帝城	外及夷域	若神若人	受生我國	或鬼或畜	容身皇州
令未發趣	發善提心	令不定聚	住正定聚	一人已趣	其人勸餘
展轉倍々	至無殃數	設在他方	猶尋旧緣	当来久々	及無量劫
上宮太子	行基菩薩	如此權化	仰乞加被	十善聖君	三乘行者
如此尊靈	以為導師	能化所化	尊卑雖殊	或救或恃	值遇無窮
始此小国	漸及塵刹	起波一門	遂滿願海		

建久九年戊午十一月七日

読み下し文 内容は難しいが敢えて読み下しを試みた。一例として参考にして欲しい。

沙門釈貞慶敬つて発願して曰く

非空非有、三性(注二)微妙にして、俗諦(世俗の立場での真理)眞諦(悟りに関する真理)の二門甚深(きわめて奥深いこと)なり。有を以て空を尋ぬれば遂に中道(絶対眞実の道理)に会い、俗に従いて真を悟るを名けて大覚(偉大な悟り)と為す。

鱗甲羽毛(うろこ、こうら、鳥の羽根、獣の毛)其の形同じならずとも、一天の下、均しく元氣(天地間に広がり、万物が生まれ育つ根本となる精気)を含む。神と人、古今より其の心を異にすと雖も同郷の中、互いに芳縁を結ぶ。況や当今においては君臣を徳化し、況や生育においては父母を恩愛す。聖風恵露は遠近を扱はず、慈山乳海は高深を測り難し。矧亦た出世においておや。親、教導、師の慈訓至りて重し。因縁転大なり。此の如きの四恩、生々幾許ぞ。其の一縁と雖も、世々尽くること無し。

若し人、自ずから大善提心を発し亦よく他に勧めば、同じく此の心を発し、眞実の法を施さん。一四句の偈、仏は之が為に説き、能く四恩に報ぜん。

我れ神国に生まれ、苟も人倫に列し、重ねて釈門に入り、慙に仏法に馴れる。一念の天心、自ら未だ発起せずして、豈他人に勧めて無上道に入らしめんや。二親の昔志、今猶忘れたるが如し。寧ろ群生(民衆)が為、大悲心を生ぜん。至孝を見る毎に身を顧みて恥ずると雖も、世人心を常とする。多く皆是の如し。忿々緩々(急いだり、ゆっくりしたり)として今徒暮を生きる。自心他心(自分の考え、他人の考え)、何つの日にか趣を發するや。

天照大神は吾朝の始祖、四海の万邦誰か其の化(人を善導する働き)に漏れんや。釈迦能仁(能仁は釈迦の意、釈迦と同意語)は三界の慈母、一代の三宝は皆彼の功より出でたり。

上古の風を聞くに、仏神は道を隔つるも、本地(もとの姿、本源)の月を顕す。権実(仮の事と誠の事)の門は通じ、一国に報いんと欲す。須く二聖(釈迦と天照大神)を仰ぐべし。方便思ひ難し、宜しく引接を施すべし。

ここに当山に就き、殊に淨地を卜(占って選ぶこと)び、始めて石巖を穿ちて、新たに宝塔を起す。土木は皆な是れ知識(高僧)の助くる所なり。知識は則ち又、宿縁(前世からの因縁)

の迫う所なり。郷相（公卿）の家、貴女（身分の高い女性）の室、綱維（寺で一般の僧を監督指導する僧の総称）の客、清信（誠実）の士、或いは一級（かいだん）を構え、或いは九輪（五重塔の頂上部分にある九つの輪）を瑩き、或いは黄金を投じ、或いは丹石（瑪瑙のこと）を抽す。帝綱（帝王が天下を治めるための根本規則）重々たり。無碍（自由自在で妨げのないこと）の境を表し、華瓔離々（果実などが良く実って垂れ下がっているさま）たり。有漏（煩惱のあること）の塵を出す。世尊の塔廟は、以って果徳（修行の結果として得られる徳のこと）を顕す。

層級数有りて、十二縁を超たり。施主の良田は以て梵福を招き、展転窮まり無くして、百千人に及ぶ。未だ必ずしも勧めを待たず、敢えて名を思わず。力に大小無し。志皆清潔（全く潔いさま）なり。少識の誓い、一念空しからず。莫大の功、二廻にして終る。

所持の尊像、敬つて玉壇に安んず。本是れ毗首（毗首羯摩天、世界創造神）、我れが為に斧を降す。所傳の仏骨、永く宝瓶に納む。久しく穢身に帯び、已に於いては軽からず。初めて臨終に謂て親しく瞻礼（禮拜）を致し、今将来に広く利益を施さんことを悦ぶ。

異朝に般若の真文を得んがために訪ね、往代（いにしへの）法華の靈本を伝來る。四王（持国天、增長天、広目天、多聞天）の尊儀を毎階に安置し、八天（色界の四禪天と無色界の四空処）の靈像を扉を廻りて羅列す。

四十超劫の本生（仏の過去世における菩薩行のこと）の勝行（すぐれた菩薩行）、彼の往事（昔のこと）を図して永恩を増欣す。五百塵點（世界を微塵に砕いた塵の一粒）に常在の聖跡、其の風景を写して恋慕の心を休ましむ。金剛崛の前には鸞鏡（中国の想像上の鳥、鸞鳥の形を背面に刻んだ鏡）光りを瑩き、淨月輪の上に覚母（文殊菩薩の称）影を留む。

九年戊午（千九百九十八年）中冬（陰曆十一月）の玄律（秋）、八音（楽器の）曲を調へ、衆香（種々の香り）匂いを薫す。供養恭敬し、讚（功德を讃えるうたいもの）を唄い唱導（説教、法話等を行うこと）す。我が願い既に満り、衆望（多くの人々の望み）も亦た足りぬ。万年末法には梁棟（はりともなぎ）傾を設け、三会下生（弥勒がこの世に出現し三回の説法を行う時）にも礎石何ぞ改むらん。古に此の山を称して靈鷲山と為し、今に此の塔を号して般若塔と為す。令し見聞する人あらば報恩の思いを知り、覚母（文殊菩薩の称）の力に依り菩提心を勧めん。予め瑞夢有り。虚実疑うと雖も今愚願を果たし、機縁（修行者が仏の導きに接し得た因縁）を知るを得る。

願わくば此の功を以て實際（真如の実理を極めてその究極に至ること）に帰入（教えを受けて深く仏の真実に従う事、帰依）し、能所（主体と客体）亡相し、自他滅罪せんことを。

開闢（天地の始まり）以来、壞劫（この世が破壊される時）以前、内は帝城（我が国）より、外は夷域（外国）に及びて、若しくは神、若しくは人として生を我が国に受け、或いは鬼、或いは畜として身を皇州に容るるも、未だ趣（来世におもむくこと）を發起せしめざるも、菩提心を発し、定聚（淨土に生まれることが決定している位）せしめざるも正定聚に住せしむ。一人の已趣、其の人、餘に勧め、展転倍增して無殃数に至る。設し他方に在るとも猶旧縁を尋ね、当来（未来）久々（非常に長い年月にわたるさま）として、無量劫（限りのない時間）に及ぶ。

上宮太子（聖徳太子）、行基菩薩、此の如くの権化（仏が仮に姿を借りて化現すること）をば仰ぎて加被（加護）を乞い、十善（殺生、邪見等の十悪を犯さない人）の聖君、三乘（声聞、縁覚、

菩薩のこと。仏道修行者の全体をいう)の行者、此の如きの尊靈をば、以つて導師と為す。

能化(他人を教化する者) 所化(弟子)、尊卑(尊いと卑しいと) 異にすと雖も、或いは救い、或いは恃みて無窮(永遠)に値遇す。此の小国より始め、漸く塵刹(限りない数の国土)に及び、波を一門より起こし、遂に願海(誓願の海)に満たんことを。

建久九年(一一九八年) 戊午十一月七日

注一、三性。法相宗の根本教義となつた存在の三種の見方。すべてのもののあり方や、本性を有と無、

仮と実という点から見ている。中村元著「仏教語台辞典」